

アナト神話：ウガリット語研究覚書(1)

松田，伊作

<https://doi.org/10.15017/2332789>

出版情報：文學研究. 65, pp. 35-66, 1968-03-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



ア ナ ト 神 話

——ウガリット語研究覚書 I——

松 田 伊 作

1. 序 1929年以来シリアの地中海岸ラス・シャムラ (Ra's aš-Šamra) で発掘されつつあるウガリット語¹⁾ 楔形文字板の中から、RS 3. 63²⁾ (1931年出土) を選び、本文の転字と日本語訳を試みながら、その際遭遇する言語的諸問題について先学の説を批判・検討し、以て筆者のウガリット語研究の出発点たらしめよう、というのが本稿の目的である。3000年以上の昔に姿を消し発見以来30年そこそこ、未だに多くの未解明の点をもつ言語の研究に際しては、最初から全体の体系的記述を試みるよりも、順次原テキストに当り corpus を広げつつ、個々の事項について研究の成果を絶えず見直しながら体系化してゆくのが結局捷徑であると思ったからである。従ってこれはあくまでも一つの間報告であり、筆者自身に対する問題の提起である。研究覚書という副題を掲げた所以である。

「アナト神話」と題したのは、かなり任意に選んだこの碑板の内容が、戦い、かつ兄バアルの神殿建築の為に奔走する女神アナトを主題とすることによる。他のいくつかの重要な碑板 (Eissfeldt 番号VIAB, IIIAB, IIAB, I*AB, IAB; IMF, IVAB, BH) と共に、これがバアル神話圏乃至 AB ('Anat·Ba'al) 神話群を形成することは一応定説となっているが、それらの内容の相互関係、例えばこれらが本来一貫した一つの物語をなすか否か、なすとすればその時間的前後関係如何、ということになると未だ意見の一致を見ない。何れにせよ、上記の目的をもった本稿の性格上、内容の一解釈学的・神話学的問題には、註釈においても立入らない。語義に就ても、それが文法的問題と関連して特に強い関心を惹くものでなければ、深い詮索をしない。ウガリット文書は近来特にエーゲ世界との関連におい

て注目されつつあるが、これについても一切触れないことにする。³⁾

2. 碑板 アレッポ博物館所蔵の原碑板は黄色粘土板で、上部約半分が欠け、残った部分の大きさは縦13.2cm 横16.2cm；他に縦4.8cm 横3.8cmの断片(1930年出土 AO 16. 639)が、欠けた上半分の上端に属するとされる。

碑板は表・裏共縦線で3欄に区切られている。⁴⁾ 失われた部分を上にし、下の欠けた欄が左に来るように置いた状態で、左から順に Col.(=欄) I, II, IIIとし、それぞれの裏側をVI, V, IVとする。Col.IIIの下は碑板の下縁を通してIVの上へと続けて切目なく書かれているのに反し、Col.IIとIVの間には刻文が見られぬ。下が大きく欠けた Col.IとVIとの関係も多分そうであろう。一方 Col.III の下から16行目と17行目の間に2本の線が刻まれ、内容上も段落を作っている。そこで Virolleaud以来、現存の Col.IをA, Col.IIと Col.IIIの最上端に属すべき断片(上記)の表側とをB, Col.IIIの区切り線から上をC, 区切り線以下とIVをD, Col.IVの下端に属すべき上記断片の裏側と Col.VとをE, VIをFと呼ぶ⁵⁾。

3. テキスト 単行本にまとめられた editio princepsのCh. Virolleaud: *La déesse 'Anat*, Paris 1938, p. 1-90 (Vir) は見る事ができなかったので、楔形文字テキストとしては Andrée Herdner: *Corpus des Tablettes en Cunéiformes Alphabétiques découvertes à Ras Shamra-Ugarit de 1929 à 1939* (Mission de Ras Shamra, Tome X), Paris, Imprimerie Nationale, 1963 の別冊 (Figures et Planches) を用い、転字に際しては次の諸著を参照した。括弧内は略号。

A. Herdner: 上掲書の *Textes* 篇, p.12-20. (H)

G. R. Driver: *Canaanite Myths and Legends*, Edinburgh 1956. (Dr)

Cyrus H. Gordon: *Ugaritic Textbook*, Roma 1965. (Grd)

テキストの名称および番号は全ウガリット語テキストにつき Otto Eissfeldt⁶⁾ のものを用いる。それによれば本テキストの番号は VAB (=Vir., Ginsberg, De Langhe) で、Grd は 'nt, Dr は BAAL V と呼び、Hの番号は3である。

4. 転字 39ページに示すように大体において Grd の方式による. a, i, u という転字は望ましいものではないが, 一字を一字で転字する原理を貫きしかも印刷の便を考えたためである.

5. 対句 ウガリット語の詩文を散文から識別する第一の特徴は, ヘブライ語などにおけると同じく, 対句法⁷⁾ (parallelismus membrorum) であるといわれる. 我々は以下の転字テキストにおいては, 句の切れ目ごとに行を変え (この本稿独特の行数を括弧に入れて示し, 原文の行を表わす小アラビア数字と区別する), 対句が容易に認定できるようにした.

対句を形の面から見ると, 1 句は 3 語によって構成されるものが大部分で, 4 語の場合も, その中の 2 語は「構成形結合」をなすものが多い. 句の数は 2 句のものが圧倒的に多いが 3 句以上のものもある.

又内容の面から見れば, 第 1 句の意義を, 第 1 句を構成する各語に近似した意義の語を用いて, 第 2 句で反復するという型が大多数である. 文法的にも両句は平行するが, 同一の形式を反復することは稀で, 固有名詞は普通名詞によって反復されることが多い. 例: A(2) || (3) (12 || 13) B(18) || (19) C(9) || (10) (11 || 12) D(50) || (51) (72 || 73) F(17) || (18)

注目に値するのは, 第 1 句の構成要素を全部ではなくて一部だけ反復する型があることである. 主語を S, 動詞を V, 目的語を O, 修飾語 (前置詞句等) を M としてこれを公式示すれば,

V-O-M || O-M: B(23) || (24) (38) || (39) C(15) || (16) D(75) || (76)

S-V-M || S-M: D(9) || (10) (28) || (29)

V-O || O: D(14) || (15) E(45) || (46)

S-V-M || V-M: B(14) || (15)

V-O-S || O-S: B(36) || (37)

O-V-S || V-S: C(26) || (27)

O-S-V || O: D(72) || (73)

以上挙げた型は極くわずかな例であるが⁸⁾, このような対句法の特徴が文法的機能や語義の不明な形式の解明に大いに役立つものであることを我

々は見るであろう。

- 〔註〕 1) ウガリット語・文学の紹介をここで試みる余裕はない。邦語によるものとして、高津春繁・関根正雄：古代文字の解説（岩波書店、昭和39年）の第5章「ウガリット文書の解説」を参照。その興味ある解説の経過が、欧米書に見られぬ正確さでここには綴られている。
- 2) Mission Archéologique de Ras Shamra (Claude F.A. Schaeffer 監督) の分類番号。
- 3) この問題と取組んだ最近の好著に Michael C. Astour : *Hellenosemitica, an Ethnic and Cultural Study in West Semitic Impact on Mycenaean Greece*. 1.ed. : 1963, 2.ed. : 1967, Leiden. がある。
- 4) 以下 A. Herdner の書物にある実物写真の観察による。
- 5) この記号を Aistleitner, Herdner らも継承しているが、Driver は BAAL Vi-vi とし、Gordon は 'nt I-VI とする。
- 6) "Bestand und Benennung der Ras Shamra-Texte" ZDMG, XCVI (1942) p. 507-39. "Die keilschriftalphabetischen Texte aus der zehnten und elften Ausgrabungskampagne" AfO, XIV(1941-4), p.371-5. "Die keilschriftalphabetischen Texte der Kampagnen 1948-51" AfO XVI (1952-3), p.116-22. "The alphabetical cuneiform Texts from Ras Shamra published in 'Le Palais Royal d'Ugarit' Vol. II, 1957" JSS, V (1960), p.1-49.
- 7) 「対句」という術語を1対の平行な形式に対してだけでなく、3句以上が平行である場合に対しても適用する。
- 8) Grd : UT § 13.108-170 に様々な型が例示されている。

6. 転字本文・訳文

原文の欠除を [] で、その中の推定字数を - の数で示す。< > 内は、原文のままでは意明不明のため、修正した箇所。訳文中、() 内は意味の補充。

A (Col. I)

約25行欠

- (1) 'al. tğl[-----] 'prdmn.
(2) 'bd. ali[yn] 'b'l. いと強きバアルに仕え、
(3) sid. zbl. b'l 'arš. 地の主なる君をあがめよ」

	a (= 'a, a')		m
	i (= 'i, i')		n
	u (= 'u, u')		s
	b		š
	g		c
	d		ḡ
	ḏ		p
	h		š
	w		z
	z		q
	ḥ		r
	b		š
	t		t
	y		t
	k		.
	l		

- | | |
|---|---------------------|
| (4) qm. yt'r ⁵ w. yšlḥmnh | 彼は起ち、(食を)備えて彼に食わせる。 |
| (5) ⁶ ybrd. ṭd. lpnwh | 彼の前で胸肉を切って、 |
| (6) ⁷ bḥrb. mlht ⁸ qš. mri. | 光った刀で肥肉の切を。 |
| (7) ndd ⁹ y'šr. wyšqynh | 彼は行ってもてなし、彼に飲ませる、 |
| (8) ¹⁰ ytn. ks. bdh | 彼の手に盃を渡して、 |
| (9) ¹¹ krpn. bklat. ydh | 彼の両手に酒甕を。 |
| (10) ¹² bkrb. 'zm. ri | 見るも堂々たる大杯、 |
| (11) dn ¹³ mt. šmm | 天の人の大甕、 |
| (12) ks. qdš ¹⁴ ltpnh. att. | 女の視れない聖盃、 |
| (13) krpn ¹⁵ l't'n. atrt. | アシラの見れない酒甕。 |
| (14) alp ¹⁶ kd. yqḥ. bḥmr | 千升の酒をそれは容れ、 |
| (15) ¹⁷ rbt. ymsk. bmskh | 万(升)の混ぜ酒をそれは混ぜる。 |
| (16) ¹⁸ qm. ybd. wyšr | 起って誦し、かつ歌う、 |
| (17) ¹⁹ mšltm. bd. n'm | シンバルを手に快く、 |
| (18) ²⁰ yšr. ḡzr. ṭb. ql | 声美しい若人は歌う、 |
| (19) ²¹ l. b'l. bšrrt ²² špn. | サパンの山なるバアルの為に。 |
| (20) ytmr. b'l ²³ bnth. | バアルは眺める、娘らを、 |
| (21) y'n. pdry ²⁴ bt. ar. | 「光」の娘ピドリアを見る、 |
| (22) apn. ṭly ²⁵ [bt. r]b. | また「驟雨」の娘タラヤを。 |
| (23) pdr. yd ²⁶ [---] t. im[-]lt | |

約13行欠

B (Col. II)

約25行欠

- | | |
|---------------------------------------|-----------------|
| (1) ² kpr. šb'. bnt. | 七人の娘の……(?) |
| (2) rḥ. gdm ³ wanhbm. | 麝香と香料の香り。 |
| (3) klat. ṭḡrt ⁴ bht. 'nt. | アナトの御殿の戸が閉じられて、 |
| (4) wtqry. ḡlmm ⁵ bšt. ḡr. | 彼女は山の麓で従者らを集める。 |

- (5) whln. 'nt. tm⁶thš. b'mq. するとアナトは低地で戦い,
 (6) thtšb. bn 'qrytm. 町と町の間で屠り,
 (7) tmhs. lim. hp y[m] 海辺の民を打ち,
 (8) ⁸tšmt. adm. šat.š[p]š 日出ずる所の人を滅ぼす.
 (9) ⁹thth. kkdrt. ri[š] 彼女の下には球のように頭(がころがり),
 (10) ¹⁰lh. kirbym. kp. 彼女の上には蝗のように掌(がとび),
 (11) k. qšm ¹¹grmn. kp. mhr. 穀物の束のように兵士らの掌.
 (12) 'tk¹²rišt. lbmth. 頭は彼女の背まで届き,
 (13) šnst ¹³kpt. bħbšh. 掌は彼女の腰に及ぶ.
 (14) brkm. tğ[ll] ¹⁴bdm. dmr. 両の膝は戦士の血に浸り,
 (15) hłqm. bmm['] ¹⁵mhrm. 両の股は兵士らの流血に.
 (16) mřm. tgrš ¹⁶šbm. 杖で彼女は老兵を払い,
 (17) bksl. qšth. mdnt 脇腹目がけて弓を張る.
 (18) ¹⁷whln. 'nt. lbth tmğyn. そこで, アナトは家に帰る,
 (19) ¹⁸tšql. ilt. lhklh 女神は戻る王宮へ.
 (20) ¹⁹wl. šb't. tmthšh. b'mq だが彼女は飽足りぬ, 平地での戦い,
 (21) ²⁰thtšb. bn. qrtm. 町と町の間での屠りに.
 (22) tt'r ²¹ksat. lmhr. 椅子を兵士らに投げつけ,
 (23) t'r. tlhnt ²²šbim. 食卓を軍勢に投げつける,
 (24) hdmm. lğzrm 足台を兵隊らに.
 (25) ²³mid. tmthšn. wt'n 激しく彼女は戦い, そして見る,
 (26) ²⁴thtšb. wthdy 'nt アナトは屠りかつ眺める.
 (27) ²⁵tğdd. kbdh. bšhq. 彼女の肝は笑いで飲む,
 (28) ymlu ²⁶lbh. bšmht. 彼女の心は喜びに満ちる.
 (29) kbd. 'nt ²⁷tšyt. げに勝利はアナトの手に.
 (30) kbrkm. tğll bdm ²⁸dmr. げに両の膝は戦士の血に浸り,
 (31) hłqm. bmm'. mhrm 両の股は兵士らの流血に.

- (32) ²⁹d. tšb'. tmthš. bbt 飽きるまで彼女は家で戦い、
 (33) ³⁰tḥtšb. bn. tḥnm. 食卓と食卓の間で屠る。
 (34) ymh ³¹[b]bt. dm. dmr. 家から戦士の血が拭われ、
 (35) yšq šmn ³²[š]lm. bš'. 平和のあぶらが鉢に注がれる。
 (36) trḥš. ydh. bt ³³[l]t 'nt. 処女アナトは手を洗う、
 (37) ušb'th. ybmt. limm ^{きみ}君侯の妹はその指を。
 (38) ³⁴[t]rḥš. ydh. bdm. dmr 戦士の血から手を洗う、
 (39) ³⁵[u]šb'th. bmm'. mhrm 指を兵士らの流血から。
 (40) ³⁶[t]'r mnt. lksat. 彼女は……椅子に整える、
 (41) tḥnt ³⁷[l]tḥn. 食卓を食卓に、
 (42) hdmm. tt'r. lhdmm 足台を足台に、彼女は整える。
 (43) ³⁸[t]ḥspn. mh. wtrḥš 水を汲んで彼女は洗う、
 (44) ³⁹[t]l. šmm. šmn. arš. 天の露、地のあぶら、
 (45) rbb ⁴⁰[r]kb 'rpt. 雲に乗る者の驟雨、
 (46) tḥl. šmm. tskh 天の注ぐ露、
 (47) ⁴¹[rb]b. tskh. kbkbm 星たちの注ぐ驟雨

B. 断片 (Col. III)

- (48) ⁴²tpp. anhb[m. 彼女は香料で粧う、
 (49) dalp. šd] ⁴³zu[h]. bym [その匂い千町に及び……

約20行欠

C (ll. 1—44 : Col. III, ll. 45 ff. : Col. IV)

- (1) ¹t]št. rimt ²lirth. 彼女の胸に珊瑚を付けよ、
 (2) mšr. l. dd. aliyn ³b'l. いと強きバアルの情愛のしるしに、
 (3) yd. pdry. bt. ar. 「光」の娘ピドリアの慕情、
 (4) 'ahbt. tly. bt. rb. 「驟雨」の娘タラヤの愛、
 (5) dd. aršy ⁵bt. y'bdr. 「宇宙」の娘アルシアの情愛(のしるしに)。

- (6) km ġlmm ⁶w. [‘r]bn. 従者のように入れ、
 (7) lp‘n. ‘nt. hbr アナトの足下に屈み、
 (8) ⁷wql. tšthwy. kbd hyt 倒れ、伏し、彼女を崇めて、
 (9) ⁸wrgm lbtlt. ‘nt 処女アナトに言え、
 (10) ⁹tny. lymmt. limm ^{きみ}君侯の妹に告げよ。
 (11) ¹⁰thm. aliyn. b‘l. 『いと強きバアルの告示、
 (12) hwt. ¹¹aliy. qrdm. いと強き英君の命令だ：
 (13) qryy. barš ¹²mlhmt 地上の戦は私の好みぬこと。
 (14) št. b‘prt. ddym 地に愛情をもたらし、
 (15) ¹³sk. šlm. lkbd. arš 大地のさなかに平和を注げ、
 (16) ¹⁴arbdd. lkbd. šdm 野のさなかにあまたの愛を。
 (17) ¹⁵hšk. ‘šk. ‘bšk 君の杖、君の旅袋をとれ。
 (18) ¹⁶my. p‘nk. tismn. 私に向って君の足が駈け、
 (19) ‘my ¹⁷twth. išdk. 私に向って君の脚が急げ。
 (20) dm. rgm ¹⁸it. ly. w. argmk 君に言う言葉が私にあるからだ、
 (21) ¹⁹hwt. w. aṭnyk. 君に告げる命令が。
 (22) rgm ²⁰š. wlhšt. abn 木の言葉と石のつぶやき、
 (23) ²¹tant. šmm. ‘m. arš. 天が地と（交す）嘆き、
 (24) ²²thmt. ‘mn. kbkbm 原洋が星たちと（交す嘆き）。
 (25) ²³abn. brq. dl. td‘. šmm 私にはわかる、天の知らぬ稲妻が、
 (26) ²⁴rgm. ltd‘ nšm. （それは）人の知らず、
 (27) wltbn ²⁵hmlt. arš. 地のやからにわからぬ言葉。
 (28) atm. wank ²⁶ibğyh. さあお出で、私はそれを求めよう、
 (29) btk. ġry. il. špn 私、サパンの神、の山中に、
 (30) ²⁷bqdš. bgr. nhlty 私の所有する山の聖所に、
 (31) ²⁸bn‘m. bgb‘. tliyt 権能の丘の美しき所に。』

D (Col. III続)

- (1) ²⁹hlm. ‘nt. tph. ilm. アナトが神々を視るや否や、

- (2) bh. p'nm ³⁰tt̥t̥.
 (3) b'dn. ksl. tt̥br
 (4) ³¹ln. pnh. td'.
 (5) t̥g̥s̥. pnt ³²kslh.
 (6) anš. dt. ʒrh
 (7) t̥su ³³gh. wt̥ʃh
 (8) ik. m̥gy. gpn. wugr
 (9) ³⁴mn. ib. yp'. lb'l.
 (10) ʃrt ³⁵lrkb. 'rpt.
 (11) lm̥h̥št. mdd ³⁶ilym
 (12) lklt. nhr. il. rbm
 (13) ³⁷lišt̥bm. tnn. išt̥bm[n]h
 (14) ³⁸m̥h̥št. b̥tn. 'qltn
 (15) ³⁹šlyt̥. d. šb't. rašm
 (16) ⁴⁰m̥h̥št. mddilm. ar[š̥]
 (17) ⁴¹šmt. 'gl. il. 'tk
 (18) ⁴²m̥h̥št. klbt. ilm. išt̥
 (19) ⁴³klt. bt. il. d̥bb.
 (20) im̥th̥s̥ w ⁴⁴itr̥t̥. hr̥s̥.
 (21) trd b'l ⁴⁵bmrym. ʃpn.
 (22) m̥š̥s̥s̥ k'ʃr ⁴⁶udnh.
 (23) gr̥š̥h. lksi. mlkh
 (24) ⁴⁷ln̥ht. lk̥h̥t̥. drkth
 (25) ⁴⁸mn̥m. ib. yp'. lb'l
 (26) ʃrt. lrkb. 'rpt.
- それだけで両足はよろけ、
 その為に腰がくだけ、
 それ故顔は汗を流す。
 彼女の腰の隅が震え、
 彼女の腰の力は衰えた。
 彼女は声をあげて叫ぶ。
 「如何してグパンとウガルは来たのか、
 如何なる敵がバアルに立ち向うか、
 (如何なる) 仇が雲に乗る者に？
 私はエールの愛人「海」を打砕いたで
 はないか、
 私は大いなる神「河」を打滅ぼしたで
 はないか、
 龍に猿轡かませたではないか、猿轡を、
 私は曲りくねった大蛇を打砕いた、
 七つの頭の暴君を。
 私はエールの愛する怪獣を打砕いた、
 私はエールの犢「頑固」を滅ぼした、
 私はエールの牝犬「火」を打砕いた、
 私はエールの娘「焰」を打滅ぼした。
 私は戦って、金を獲た、
 サパンの高丘からバアルを追う者あれば。
 そいつの耳を鳥のようにむしって、
 彼(バアル)を王の椅子から追う者は、
 玉座から、その支配の座から。
 如何なる敵がバアルに立向うか、
 (如何なる) 仇が雲に乗る者に？」

- (27) ⁴⁹[w]ˈn. ɡlmm. yˈnyn 二人の従者は答えていう。
- (28) lib. ypˈ ⁵⁰lbˈl. 「如何なる敵もバアルに立向わぬ、
- (29) ʃrt. lrbk. ˈrpt (如何なる) 仇も雲に乗る者に。
- (30) ⁵¹thm. aliyn. bˈl. いと強きバアルの告示、
- (31) hwt. aliy ⁵²qrdm. いと強き英君の命令(をよく聞け。)
- (32) qryy. barʃ. mlhmt 『地上の戦は私の好まぬこと。
- (33) ⁵³št. bˈprm. ddym. 地に愛情をもたらし、
- (34) sk. šlm ⁵⁴lkbd. arʃ. 大地のさなかに平和を注げ。
- (35) arbdd. lkbd. šdm 野のさなかにあまたの愛を。
- (36) ⁵⁵[h]šk. [ˈ]šk. ˈbšk. 君の杖、君の旅袋をとれ。
- (37) ˈmy. pˈnk ⁵⁶[tɪs]mn 私に向って君の足が駆け、
- (38) [ˈ]my. twth. išdk 私に向って君の脚が急げ。
- (39) ⁵⁷[dm. rgm. it. ly.] wargmn. 君に言う言葉が私にあるからだ、
- (40) hwt ⁵⁸[waṭnyk. 君に告げる命令が。
- (41) rgm.]ˈʃ. wlhšt ⁵⁹[abn. 木の言葉と石のつぶやき、
- (42) rgm. ltd]ˈ nš[m. (それは) 人の知らず、
- (43) wlt]bn ⁶⁰[hmlt. a]rʃ. 地のやからにわからぬ言葉。
- (44) [tant. šmm. ˈm. a]rʃ 天が地と(交す)嘆き、
- (45) ⁶¹thmt. [ˈmn. kbkbm. 原洋が星たちと(交す)嘆き。
- (46) abn. brq] ⁶²dlt[dˈ šmm. 私にはわかる、天の知らぬ稲妻が。
- (47) atm. wank] ⁶³ibg[yh. さあお出で、私はそれを求めよう、
- (48) btk. g]ry. il. ʃpn 私、サパンの神、の山中に、
- (49) ⁶⁴bq[dš. bgr. nḥ]lty 私の所有する山の聖所に。』
- (50) ⁶⁵wt[ˈn. btl. [ˈ]nt. そこで処女アナトは答える、
- (51) ttb ⁶⁶[ybmt.]limm. 君侯の妹は応ずる。
- (52) [a]n. aqry ⁶⁷[barʃ]. mlhmt[. 「私も地上の戦を好まぬ。
- (53) aš]t. bˈprm ⁶⁸ddym[.] 私は地に愛情をもたらし、
- (54) ask[. šlm.]lkbd. arʃ. 大地のさなかに平和を注ごう、

- (55) ⁶⁹ar [bdd.] lkb [d. š] dm. 野のさなかにあまたの愛を。
- (56) yšt ⁷⁰ [----] b'l. mdlh.
- (57) yb'r ⁷¹ [-----] rnh.
- (58) aqry ⁷² [---] ba [r] š. mlhmt 私も地上の戦を好まぬ。
- (59) ⁷³ašt [b'] p [r] m. ddym. 私は地に愛情をもたらし、
- (60) ask ⁷⁴šlm. lkb [d]. arš. 大地のさなかに平和を注ごう、
- (61) arbdd ⁷⁵lkbd. š [d] m. 広野のさなかにあまたの愛を。
- (62) ap. mtn. rgmm ⁷⁶argmn. さて言いたいことがもう一つ、
- (63) lk. lk. 'nn. ilm 行け、行け、神々の使者たち、
- (64) ⁷⁷atm. bštm. あなた方はのろいが、
- (65) wan. šnt 私は速かに去る、
- (66) ⁷⁸uğr. lrhq. ilm. 神から遠い（この）Uğr を、
- (67) inbb ⁷⁹lrhq. ilnym. 神々から遠い Inbb を。
- (68) tn. mtpdm ⁸⁰tht. 'nt. arš. 大地の泉の二層下、
- (69) tlt. mth. gyrm 水源からは三尋の。」
- (70) ⁸¹idk. lttm pnm. 'm. b'l こうして彼女は顔をバアルに向ける、
- (71) ⁸²mrym. špn. balp. šd. 千町万里の（彼方）サパンの高丘に。
- rbt. kmn
- (72) ⁸³hkk. aht. b'l. y'n. 妹が来るのをバアルは見る。
- (73) tdrq ⁸⁴ybn. abh. 父の娘が歩いてくるのを。
- (74) šrhq. att. lpnnh 彼女の前から妻達を遠ざけ、
- (75) ⁸⁵št. alp. qdmh. 彼女の前に牛をおいた、
- (76) mria. wtk ⁸⁶pnh. 彼女の眼前に肥肉を。
- (77) tšpn. mh. wtrš 水を汲んで彼女は洗う、
- (78) ⁸⁷tl. šmm. šmn. arš. 天の露、地のあぶら、
- (79) tl. šm [m. ts] kh 天の注ぐ露、
- (80) ⁸⁸rbb. nskh. kbkbm. 星たちの注ぐ驟雨。
- (81) ⁸⁹ttpp. anhbm. 彼女は香料で粧う、

(82) dalp. šd[.zuh. bym]

その匂い千町に及び……

約16行欠

E (ll. 1—8 : Col. IV 続, ll. 9ff. : Col. V)

(1) ^{2*}[wn. in. ^{1*}bt]. l[b'l. km. ilm.

ああ、バアルには(他の)神々のような家がない、

(2) wh̄zr] ¹kbn. [atr̄t.

アシラの子らのような邸も、

(3) m̄tb. il. m̄zll] ²b̄nh.

エールのすまい、その子らのすみか(も)、

(4) m[tb. rbt. atr̄t. ym]

大いなる「海のアシラ」のすまい(も)、

(5) ³m̄tb. pdr[y. bt. ar.

「光」の娘ピドリアのすまい(も)、

(6) m̄zll] ⁴tly. bt. r[b.

「驟雨」の娘タリアのすみか(も)、

(7) m̄tb. ar̄sy] ⁵bt. y'bdr[.

「宇宙」の娘アルシアのすまい(も)、

(8) m̄tb. kl̄t] ⁶knyt.

全き花嫁のすまい(も).」

(9) wt'n[. btl̄t. 'nt]

すると処女アナトは答える：

(10) ⁷ȳtbly. tr. il[. aby

「父なる牡牛エールは私に従う、

(11) ----] ⁸ȳtb. ly. wlh.

……私に従う……

[-----⁹----

(12) a]m̄sh̄. nn. kimr. lar̄ş

私は彼を子羊のように地に突倒し、

(13) ¹⁰[ašhlk]. šbth. dmm.

彼の白髪を血と共に滅ぼそう、

(14) šbt. dqnh ¹¹[mm'm.]

彼の顎の白髭を流血と共に。

(15) [-]dl. ytn. bt. lb'l. kilm

もし彼がバアルに神々のような家を与えぬならば、

(16) ¹²[wh̄z]r. kbn. atr̄t

アシラの子らのような邸を。」

(17) [td'ş.] p'n ¹³[wtr. a]r̄ş.

彼女が足を踏むと、地が揺れた。

(18) id[k. ltt̄n. p[nm ¹⁴['m. i]l.

こうして彼女は顔をエールに向けた、

(19) mbk. nhr[m.

諸川の源、

(20) qr]b. [ap]q ¹⁵[thm]tm.

二つの淵への注ぎ口(に住むエール

- に).
- (21) tgl. d[d.]i[l.] 彼女はエールの土地に入り,
- (22) wtbu ¹⁶[qr]š. m[l]k. ab[.šnm.]
 Šnm の父なる王のやかたに着く.
 …土地に着く.
- (23) mšr ¹⁷[t]bu. ddm. …土地に着く.
- (24) qn[—]n[—]lt
- (25) ¹⁸qlh. yš[m'.]tr. [il].abh. 彼女の父なる牡牛エールを声をあげ
 る,
- (26) [---]l ¹⁹bšb't. ḥdr̄m. 七つの部屋で……
- (27) [bt]mn[t. ap]²⁰sgr̄t. 八つの小室で.
- (28) g[-].[-]ṣ[---]h[-----]
- (29) ²¹n. tk[-----]
- (30) ²²ln. t[-----]
- (31) ²³lp'n. gl[m]m[-----] 若者らの足もとに……
- (32) ²⁴mid. an[----]n[-----] 非常に……
- (33) ²⁵nrt. ilm. špš[. ṣḥrr]t エールの光なる「太陽」は照りつけ,
- (34) ²⁶la. šmm[.]by[d. bn. ilm. m]t
 エールの子「死」のため天は衰えた.
 すると処女アナトは答える,
 「……げに, おおエールよ……
 ……喜んではいけない.
 ……喜んではいけない.
 さもないと私はそれを掴む, ……
 私の大きな長? であなたの頭蓋を砕
 く.
 あなたの白髪を血と共に滅ぼす,
 あなたの顎の白鬚を流血と共に。」
 エールは答える,
- (35) ²⁷wt'n. btl̄t. 'n[t.
 (36) -----]²⁸k. yilm.
 (37) b[-----]. a[l. tš]mḥ
 (38) ²⁹al. tšmḥ. b[-----]
 (39) ³⁰al. aḥdhm. by[---
 (40) ³¹bgdl̄t. ark̄ty. am [ḥšk]
 ³²qdqdk.
 (41) ašhlk. šbt[k. dmm]
 (42) ³³šbt. dqnk. mm'm.
 (43) y'ny ³⁴il.

- (44) bšb't. ḥdr̥m. bt̥mnt ³⁵ap. sgr̥t.
七つの部屋で、八つの小室で。
- (45) yd' [tk.] bt. kan [št̥]
「娘よ、私は知っている、お前の優しい
ことを、
- (46) ³⁶kin. bilht. ql [s̥] t.
女神達の中に悪意はないことを。
- (47) mh. tarš ³⁷lbtlt. 'nt.
何が欲しいのだ、処女アナトよ。」
- (48) wt [n̥]. btl̥t. 'n [t̥]
そこで処女アナトは答える。
- (49) ³⁸tḥmk. il. ḥkm.
「エールよ、あなたの告示は賢くく、
- (50) ḥkmk ³⁹'m. 'lm.
あなたの知恵は永遠のもの。
- (51) ḥyt. ḥṣt. tḥmk
幸な生命はあなたの告示。
- (52) ⁴⁰mlkn. aliyn. b'l.
我らの王はいと強きバアル、
- (53) tṣṭn ⁴¹in. d'lnh.
勝るものなき審判者。
- (54) kl̥:yy. q̣'h ⁴²nbl̥n.
我らみな彼の酒杯を運ぶ、
- (55) kl̥nyy. nbl̥. ksh
我らみな彼の盃を運ぶ。」
- (56) ⁴³any. lyšḥ. tr̥. il. abh.
その時、彼女の父なる牡牛エールが叫
ぶ、
- (57) il ⁴⁴mlk. dyknnh.
彼女を生ませた王エールが。
- (58) yšḥ. aṭrt̥ ⁴⁵wbnh.
アシラとその子らが叫ぶ、
- (59) ilt̥. wšbr̥t. arḥh.
イルトとその一族が。
- (60) ⁴⁶wn. in. bt. lb'l. km.
「ああ、バアルには (他の) 神々のよ
うな家がない、
- ilm
アシラの子らのような邸も、
- (61) ⁴⁷ḥṣr̥. kb [n. a] tr̥t.
エールのすまい、その子のすまい(も)、
- (62) mṭb̥. il ⁴⁸mṣll̥. b [nh̥.
大いなる「海のアシラ」のすまい(も)、
- (63) mṭ] b̥. rbt̥. aṭrt̥ ⁴⁹ym.
「光」の娘ピドリアのすまい(も)、
- (64) mṭb̥. [pdr̥] y. bt. ar̥
「驟雨」の娘タリアのすまい(も)、
- (65) ⁵⁰[mṣll̥.] tly̥ [̥. bt.] rb̥.
「宇宙」の娘アルシアのすまい(も)、
- (66) mṭb̥ ⁵¹[aršy. bt. y' bdr̥.....

約23行欠

F (Col. VI).

約10行欠

- | | | |
|------|---|------------------------|
| (1) | ¹ [------] b | |
| (2) | ² [------r] išk | …お前の頭… |
| (3) | ³ [------] bn 'nkm | …お前達の眼の間… |
| (4) | ⁴ [------] alp | …千の… |
| (5) | ⁵ [------] ym. rbt | …万の… |
| (6) | ⁶ [----] bnhrm ⁷ ['br]. gbl. 'br ⁸ q'l | 諸川の中…山を越え岡を越え, |
| (7) | 'br. iht ⁹ npšmm. | 天の高みの果を越え, |
| (8) | šmšr ¹⁰ ldgy. atrt | 進め, アシラの漁夫よ. |
| (9) | ¹¹ mg. lqdš. amrr | 行け, カデシ・アムラルよ. |
| (10) | ¹² idk. al. ttn ¹³ pnm | そうして, しかと顔を向けよ, |
| (11) | tk. ḥqkpt ¹⁴ il. klh | Hqkpt に. そのすべてはエールのもの, |
| (12) | kptr ¹⁵ ksu. ṭbth. | カフトルは彼のいます座, |
| (13) | ḥkpt ¹⁶ arš. nḥlth | Hkpt は彼の所有の地. |
| (14) | ¹⁷ balp. šd. rbt ¹⁸ kmn. | 千町万里 (の彼方) にて. |
| (15) | lp'n. kt<r> ¹⁹ hbr. | クサルの足下に屈み, |
| (16) | wql. tšth ²⁰ wy. wkbd hwt | 倒れ, 伏し, 彼を崇めて, |
| (17) | ²¹ wrgm. lktr ²² wḥss. | クサルとハシスに言え, |
| (18) | tny. lh ²³ yn. dḥrš. ydm | 両手の器用な巧者に告げよ. |
| (19) | ²⁴ thm. al [iyn. b'l] | 「いと強きバアルの告示, |
| (20) | ²⁵ h[wt. aliy. qrdm] | いと強き英君の命令. |

約20行欠

部分的欠除個所やそのままでは意義不明の個所に対しては, 上掲本文に採用したものの他に, 次のような読方が提案される. その主なものだけを挙げる. () 内は提案者を示す. また文脈が同じと推定される他の個所

による補読はその個所を→で示す。

- A 1. tǵlp(Dr) 5. wašlhmnh(Gray) 9. wyšqnyh(Dr, H)
- B 31. [b]bt(H) : bt(Dr), -dt(Grd) 36. [t]‘r(H) : [t(?)t]‘r(Vir, Ais, Gray) : [t̥a]r(Gaster) [ti]r(Cassuto)
- C 6. w[‘r]bn(Dr, H) : w.- -bn(Grd)
- D 37. išbm[n]h(Vir, Grd) : išbm[p?]h(Ais), ištmlh(H) 40. ar [š̥](Dr, H → IAB : VI50) : ar[š̥](Vir, Ais), ar/š̥ mt(Grd)
43. w(Vir, Ais) : ksp(H) 45. mššš k‘š̥:(Grd, H) : mššš(?) w‘š̥r (Vir, Dr), mššy k‘š̥r(Ais) 49. [w]‘n(Grd) : [y]‘n(Vir, Dr), [wy]‘n(Ais) 51-54→C 10-20 54→C 24 60→C 25a, C 21 61-62 a→C 22, 23 62 b→C 25 b 63-64→C 26-27 66-69→C 11-14 70. b[š̥mm.] (Dr) 71. [il. hd. q]rnh(Dr) 72. an[k.]ba[r]š̥(Dr) 87→B 40 89 →B 42
- E 1-6→IIAB : I10-19, IV 50-57 7. il[.aby](Grd, H) : il[wlh. argmh](Dr) 8. [at̥nyh](Dr) 9. a[mš̥h](Ais) : i[mš̥h](Grd), [mš̥h. a]mš̥h(Dr) 10→E 32 11→E 33 12-13 a→IIAB : IV-V 82 b-83 13-16→IAB : I32-36, IIAB : IV20-24 18. yš[m‘.] (H) : yš[u.] (Dr, Ais, Jirku), yš[a] (Vir) 20. g[m]. [l]t[š̥h.] li[l] (?) (H) 20. [wy]/‘n. tr[il. abh] (Vir) 22. t̥[r. il- -] (Dr) 25-26→IAB : II 24-25 27. ‘n[t. bnt.]bht(H) 28. bnt[.]bh[tk̥. a[l. tš̥]m̥h(H) 29. br[m. h]kl[k] (H) 30. aḥdhm(Dr, H. etc.) : tḥdhm(Grd) 31. am[h̥šk] (Dr) : -m[(Grd) 36. ql[š̥]t(Dr, Grd) : ql[š̥]k(H) tarš̥(H) : tarš̥[n] (Dr, Grd) 38-51→IIAB : IV-V 41-57
- F 3. ‘nkm(H) : ‘nkn(Dr, Grd) 13と14の間に ‘m. ktr. whss(Dr)

7. 註 釈

A.

- (1) *prdmn* はおそらく神の名であろう (Ais : WU, etc.)
- (2) ‘*bd*, *sid* は Grd (UT § 13.25) では ‘過去’ の行動を表わすとき

れ、Ais (WU) も *prdmn* を主語とする *ta* (=tempus affirmativum) 動詞と考える。 *sid* は同根の動詞が *sad. kbd. hmt* (IID : V20) のように用いられ、これは *tsad. tkbd. hmt* (IID : V30) における *tsad* 《彼はあがめる》と比べるとき *imp* とせざるを得ない (V20 の命令の実行が V30 で叙述されている)。従って Ais (WU) のように *sid, sad, tsad* を何れも D 動詞 (qattala 形) とするときには *sid* は *ta* ということになる。私見によれば *sad* (= *sā/i'ad*) は G 動詞 (qatala 形) の *imp*, これに対して *sid* (= *saa'id < *sa''id*) は D 動詞の *imp* とすべきである。文脈的にも前行に *al. t-《…するな》* とあって、ここに命令が述べられていることは明らかである。○ *aliyn* は *l'y* (ph. *l'y*, ac. *le'û*) 《強くある》の *af'alu* 型名詞。しかしこの型の語形成はアラビア語・ヘブライ語以外では稀である。 *aliyn* は常に *b'l* と結合して現われ、バアルの *epithet* と考えられる。 *b'l* が神名として単独で現れる例は全ウガリット文書 142, その中 80 例は AB 神話群にあるのに対し、 *aliyn b'l* は全 65 例中 62 例までが AB 神話群に見出される。○ バアルは旧約聖書では pl. *b'âlîm* を取るなどして、アシタルテ (hb. *'āšîret*, これも殆んど pl. で現れる; ug. *'ttrt*, ac. *Ištar*) と共に異教の神々の代名詞のように (例えばサムエル上 7 : 4) なっているが、ガウリット語では神々の一の名であって pl. をとることはない。セム語共通 (ph. *b'l*, arm. *ba'lâ*, arb. *ba'l*, ac. *bêlu*) の本来の普通名詞としては、ここの「地の主」のように、属格に支配されるか、又は人称接尾辞をとる。

(4) *yṭ'r* は Ais (WU) によれば動詞 *ṭ'r* の *tpn* (=tempus praeformativum narrativum) とされる。すなわち Ais は動詞の 'Zeitformen' を *ta* (cf. A 1 註, =Grd : UT の *qtl* 形) と *tp* (=tempus praeformativum, =Grd : UT の *yqtl* 形) とに大別し、後者については更に *modus jussivus* の他に *tempus narrativum* 又は *historicum* と *tempus praesens-futurum* (=pf) とが形態的に区別されるべきだとする (GU p. 57)。この仮説は既に H. Bauer (Die alphabetische Keilschrifttexte

von Ras Schamra, Berlin 1936, p. 67) や A. Goetze (“The Tenses of Ugaritic” JAOS 58, 1938, p. 266-309) によって立てられたもので、アッカド語の‘過去’形 *iḫrus* : ‘現在’形 *iḫar(r)as* に対応して、ウガリット語にも ‘imperfect’ *yaqtulu* : ‘present-future’ *yaqat(t)alu* (Goetze 上掲論文) の対立を想定するものである。これに対して Grd (UT § 9.2) は Ginsberg と共に、散文テキストにおいて未来の叙述にも **ylqh* ではなく *yqh* が現れる点を挙げて、少なくとも文法上の両形式の対立は認めない。たしかに *yaqattalu* 形があれば *lqh* 《取る》の‘現在・未来形’は *yalaq(q)ah* となるから当然 *ylqh* と書かれる筈である。しかるに実際には *yqh* (= *yiqqah* < **yilqah*) だけが現れるのだから、上の想定は成立たなくなる。しかしながらこれはこれだけでは片付けられない問題であり、全セム語動詞体系を改めて検討する所までゆかなければならないであろう(例えば cf. An Introduction to the Comparative Grammar of the Semitic Languages, Phonology and Morphology, ed. by S. Moscati. Wiesbaden 1964, p. 131以下)。ただし問題を此处や以下の類似の個所に限定するとき、従来の「未完了形」(Imperfectum) という一つの ‘tempus’ を想定するだけで充分だと思われる。たとえ *yaqtulu* と *yaqattalu* との対立を認めるとしても、Ais のように過去の出来事の叙述はすべて tpn で、未来に言及しておれば pfu だというのは、あまりに印欧語的な見方に過ぎ、セム語動詞の本質を把握したものとはいえない。この(4), (5)にかけて見られる ta+tp 構文はアラビア語(例えば H. Reckendorf: Die Syntaktischen Verhältnisse des Arabischen. Brill 1898, § 110) やヘブライ語(関根正雄: イスラエルの思想と言語, 東京 1962, p. 288 以下) でも用いられている。Grd (UT § 13.52) は最初の ta. qm を ‘verb of inception’ とよび、《He proceeded (UL では arose) to prepare a repast / So that he might feed him》(UMC) と訳している。「完了形」「未完了形」の意義の対立は、表現者が動作を心理的に完結したものと見なすか、未完結のものとして把えるかの対立だと思うのであるが、

ここの例で完了形 (ta) と未完了形 (tp) とが並列されているのは、表現者 (= 詩人) の心理的視点が *qm* (ta) という動作の完結点に注がれ、この時点において動作主が *qm* という動作を完結すると同時に、*yṭ'r* (tp) 以下の動作を未完結のものとして意識していたことを表わすのである。上掲の Grd のような訳が成立つのもこのように説明できる。拙訳は同じ事態を外側から眺めて表現したわけで、翻訳という枠の中ではこのように文体も考慮して原語の意義の一面しか移し得ないのである。

(7) *ndd* は Ais (WU) によれば pt. act であるが、ここは明らかに(4)と同構造の文と見て、ta とすべきである。Grd はこれも *qm* と同様 verb of inception とする。

(8) *bdh* : *b+yd+sf. s 3 m*; cf. syr. *bad*

(10) *ridn* を二つに分け、*ri* を *ru* (*r'y*) の属格とする (Dr < Cassuto). Gray (p. 39, p. 284-5) は W. Thomas (VT, XII 1962, p. 499-500) の箴言 23 : 31, 31 : 4 の解釈を援用して《draught》と訳す。Ais (WU) は *rid+n* (sf. s 3 m)《erbeben machen》とする。

(11) *šmm*《天》は Ais (WU) によれば《staunen》。

(13) アシラは旧約の士師 3 : 7・列王上 18 : 19 等でバアルと共にカナン沃地の神として現れ、申命 16 : 21・イザヤ 17 : 8 等ではカナンの聖所で祭壇の傍に立てられた木柱のこと。ウガリットでは最高神エールの妻。

(14) 千と万との対語は cf. 「千町万里」(D 82, 89 F 17) ○ *yqh* : cf. A 4註. Ais (WU) ではこれも tpn.

(16) ここも(4), (7)と同じく ta+tp+*wtp* 構造。

(19) 'l を Dr (< Gaster) により前置詞とする。Ais (WU) は動詞 'ly《上る》の ta, s 3 m とする ○ *šrrt* は常に *špn* と共に用いられる (IAB : I 16, 29, 34, VI 12 IIAB : IV-V 117). ar. *širâr* 参照 ○ *špn* サパンはおそらく地名。Dr (< Dhorme) は hb. *šapôn* 《北》と関連づけ、Dussaud (RHR 113, 1938, p. 133-169) 等はここのパアルを「いと強きパアル」と別の存在とする。従って以下の解釈は、'l の解釈とも関連

して、様々である。

(20) *ytmr* は '*mr* の *Qt* (*yittamir* < **yi'tamir*, cf. Grd : UT § 9.47) (Ais : WU); Dr (<Cassuto) によれば *mrr* の *V* (taqattala 形) で 'pass to and fro before'.

(21) *ar* (ph. '*r*, hb. '*ôr*, ac. *ûru*) 《光》は女神名? Dr, Gray : 'moisture' (語根 '*ry*) ○ピドリアの母音については Grd (UT § 19.2021) を見よ。

(22) *apn*《また》は *ap* (hb. '*ap*, syr. '*âp*) + 強勢 *n*? 《驟雨》も女神名? タラヤ (hb. *tal*《露》) の母音については Grd (UT § 19, 1037); 露と驟雨についてはミカ 5:6 を見よ。

B

(2) *anhbm* は動物(蜜蜂? 兎?) からとった香料? この個所は前文欠除のため不明。おそらくアナトの化粧の様。cf. B 42-43.

(3) *bht* は *bt* 《家》の pl. とされる (Dr < Dhorme, Grd : UT) が, *bht* 自身 *bhtm* という pl. をもつ故, Ais (WU) はこれを ar. *bahw* と対応させて 'Prachthaus' とする ○ '*nt* は既出のアシラなどと共に豊饒女神の一で同時に本文書でも述べられるように好戦の女神, バアルの妹(?) (cf. C 9 等). 旧約では *bêt* '*anât*, '*anâtôt* の地名に残る. これら及び RŠ 14.16 (Syria, XXVIII, 1951. p. 174) 1.7 の '*A-na-ti-um-me*《アナトは母》からアナトの母音は再構される。

(4) Ais (WU) によれば, *tqry* 'sie trafen' は *glmm* を主語とし, *bšt* (: ar. *sitt*) *gr* 'mit der Herrin des Berges' を補語とする. 拙訳は Dr, Gray に拠る。

(5) *hln* はここ B 17にだけ現れる. Ais (WU) は *hl*《これ》の pl., Dr, Grd. は《見よ!》とする。

(6) *bn qrytm* 《町と町の間で》を Ais (WU) は, 《町に属する者たちを》とし, *-m* を pl. 語尾と考える. しかしそれならば *qryt* ではなく *bn* の方が pl. をとらねばならない (hb. *ben-'âdâm* : *bnê-'âdâm* 等; もっと

も *bn* の pl. 構成形の語尾は表記されないから、《町々に属する者ら》とすればこの説も成立つ）。また *thtšb* は *hšb* の Gt で、自動詞だから、目的語をとらない筈 (Dr). *Ais* はこれを (7)の「海辺の民」、(8)の「日出ずる所の人」との対句と考えたらしいが、我々はむしろ(5)の「低地で」との対句と見なして、*bn*(: hb. *bên*, ar. *baina*)+*qrytm* (*qryt* の双数) とする。

(7) 「海辺」は西, 「日出ずる所」は東を意味する (Ginsberg>Dr).

(8) cf. 'rb. *špš* 《日沈む所》(III K : V 18 9 : 9 180 : 52, 56 f). 古メソポタミアの固有名詞に Samas, Samsu, Šamas, と並んで Sapsi, Šapša があるといわれる (*Ais* : WU)

(15) *hlqm* を Grd (UT) は ar. *halq* によって 'up to the neck' (-*m* は副詞的接尾辞) とする; 我々は一応 *brkm* の対句として hb. *ḥalâšaim* 'loins' を援用する; 但しこの場合の *š* : *q* の対応は hb. 'rš : arm. 'rq 《地》(Gray p. 42) にも拘らず問題であろう。

(19) *Ais* (WU, 2678) は *ilt* を, 多分普通はアシラの副名である (E 45) ためか, *il* の pl. とし, 《アナトが家に帰ると, 神々が王宮に居た》のように解する。しかしここは欠張り(18)の対句で, *ilt* || アナト, *bth* || *hklh*, *tštql* (*šql* の Gt, tp. s 3 f) 《reach(Grd)》とすべきである。

(20) *tmthšh* を *Ais* は *mḥš* の Gt と tD (taqattala 形) の混淆形の inf. +sf. s 3 f とし, 次行の *thtšb* も tDt (?) 形の inf. とする。彼は *šb't* という ta 動詞の後には inf. が来るべきものと考えているのでこれら 2 形の *t-* の説明に無理をしているのである。ここは 2 つとも tp 動詞とすれば, A(4)で論じた ta+tp+tp という構文をここにも見ることができる。但し *tmthšh* の -*h* は説明困難; あるいは -*n* energicum と関連するか。cf. (25) *tmthšn*.

(22) *t'r* 《投げつける》は *Ais*(WU), Dr.(cf. ar. *ta'ara*) に従う; A 4, B21 の *t'r* 《準備する》とは同形異義と見なす。

(29) *kbd*=*k*+*bd* (<**byd*). *k* (: hb. *kî*) は temporal な接続詞 (*Ais* :

WU) というよりも、総じて後続の形式の意義を強める機能をもつ、と考えられる。

(36) *btlt*《処女》(hb. *btûlâ*, ac. *batultu*, ar. *batûl*) はアナトの epithet. この語は古代セム諸語を通じて大体《夫のない若い女》という意味。cf. Grd : UT § 19. 540 及び例えば創世記 24 : 16 「男のまだ知らぬ *btûlâ*」

(37) *ybmt. limm*《君侯の妹》は Gray (p. 43) に拠る。 *ybmt*=*ymmt* (C 9), *ybnt* (D 84) ? これが「処女アナト」の副名であることは明らか。

(40) *mnt*の意義は不明。《Geräte, Möbel》(Ais), 《portion》(Dr < Albright), 《portions of meat》or《limbs(of her victims)》(Gray)

(44) 以下は(43)の「水」に対する修辭的形容；しかし Grd (UT § 13. 11) のように文法的に 'acc. of material' とする必要はない○「天の露。地のあぶら」は創世記 27 : 28 参照。

(45) *rbb* (hb. *rbîbîm*) は *mtr* (hb. *mâtâr* 等) との対立上 Grd のように 'rain' とはしない方がよい○*rkb*《乗る者》は分詞(*râkib*)。第 3 根字' 動詞以外では ta 形と分詞との文字面での識別不可能。「雲に乗る者」はバアルの epithet. cf. 詩篇 68 : 5 *rôkêb bâ'arâbôt*

(46/47) このような「関係詞のない関係文」(既出 A 12, 13) はセム語文構造上の一特徴である (例えば Reckendorf, 上掲書 § 171 以下, C. Brockelmann : Hebräische Syntax, Neukirchen 1956, § 146-149 参照)

C

(5) *arşy* が *arş* (: hb. 'ereş, ac. *irşitu* ar. 'arḏ)《地》と関連することはおそらく自明。「地の女神」として農作に関係? ○*y'bdr*《宇宙》=*y'b* (: ar. *wa'iba*《広い》)+*dr* (: ar. *da'a/ur*《土地/世代》)(Dr)

(6) Dr の解釈に従う。すなわち *km*=hb. *kmô*, '*rbn* は du. 2m. imp. +n. energ. しかし *w* が pleonastic になる。最後の語は名詞かも知れない (Grd : UL)

(7)-(9) これが告示を告げるときのきまり文句らしい (II AB : VIII 27 f V AB : F 19 f) ○*hbr*, *ql*, *kbd* が imp. (du. 2 m) であるのに *tšthwy*

(*ḥwy* の *Št*, *tištaḥwiy*) は tp (Ais: WU は jussiv とする). Grd によれば Gt と *Št* の命令形は yqtl 形 (=tp) の 2 人称形で代用される (UT § 13.54, 58) という.

(12) *aliy. qrdm* はこの定型化した文においてのみ用いられる.

(13) *qryy* を名詞 *qry* 《contrariety》(Dr)+sf. s1 とする. Ais は動詞 *qry* 《treffen》+sf. s1 (GU p.73) とし, Gray は *qry* の ‘使役形’ (《cause to happen》) を考える○以下(17)までは特に解釈がまちまちであるが, ここでは触れない.

(15) *sk* は *nsk* (B 40) の imp.

(18, 19) 前置詞 ‘*m*’ の意義は《…の傍に, 共に》であり, このように「駈ける」「急ぐ」という動詞と統合すると「…に向かって」(lit. 《…と共にするように》) と訳されることになる.

(19) *twḥ* を Ais(WU) は *wḥ* の tD (*tawattaḥa*) (: ar. *wḥ*, IV), optativ とする (彼は *ta* の機能の一つに optativ が als Projektion einer gewünschten Abgeschlossenheit in die Zukunft あるという (GU, p.50). 文脈によって様々に異なる意味を同一形式が表わし得るからこそ, その形式に固有な一つの意義が探求されねばならない). しかしむしろ Dr, Grd のように *wḥ* (y) の Gt, jussiv とすべきである. 結果的に意味上は大差ないが, こうすれば(18)の *tlsmn* (*lsm* の jussiv + *n*) と文法的にも対語となる.

(20/21) このような *w* の用法もヘブライ語等では普通.

(22)~(24) は嵐の前触れの描写? *abn* は $\sqrt{byn}$, *brq* (: hb. *bârâq*) は《稲妻》; Ais (WU) は *abn* を $\sqrt{bny}$ 《建てる》, *brq* (: ac. *parak-ku*) を《神殿》と解するが無理である○*dl* は関係詞 *d* (: hb. *zû*, syr, arm. *d*, ar. *ḏû*)+否定詞 *l* (: hb. *lô*, ar, arm, ac. *lâ*). Dr は *l* を強勢詞 (: ar. *la-*, ac. *lû*) とする. ○なおこの構文を次行の構文と比較 (上記 B(40) 註参照)

(28) *atm* は ‘*tw*《来る》’の imp. s.f. + *m*. -*m* は betonende Partikel

(?) (Ais : GU, p. 70) cf. VIAB : III 16 : *at. w. ank. ib[gyh]*; Dr は 'thou' と訳している. 然し人称代名詞ならば, 2 s には *at ('attâ, 'atti)* という形式があるから 2 du (*'attumâ*) 又は 2 pl m (*'attum*) でなければなるまい. 2 du の *atm* は D 77 に現れる ○ *ibgyh* は Ais (WU) によれば praesens-futurum (cf. 上記 A 4 註)

(29) *il. şpn* は *gry* の -y (sf, sl) と '同格'.

D

(1) *hlm*《as soon as》(Grd:UT)は必ず動詞 *ph*《見る》を伴って用いられる : cf. III AB : B 21 II K : I-II 53.

(2) *bh* は以下の *b'dn*, *'ln* と共に前置詞 + sf. s 3 m (-*hû~nû?*). いずれも理由を表わすものとしておく (Ais : MT) が, 身体部分との関連で《中》《後》《上》と考えることも可能で, この場合 sf は s 3 f (-*hâ~nâ?*) となる.

(6) 動詞 + (名詞 + 名詞) という構文で (5) と対句をなす. 即ち身体名詞 (Ais. 《schwankende Körperteil》; Dr. 《muscle》 < Goetze, 《hind-part》 < Gaster, Grd. ?) とされる *anš* は私見によれば, ac. *enêsu* 《弱くなる》, hb *'nš*(nif.) 《病む》と対応する動詞; *dt* もここは nota genetivi (Ais) ではなくて ac. *dûtu* 《Zeugungskraft, Potenz》(AHW) と対応する名詞.

(7) これも定型化した表現 : *yšu. gh. wyşh* は I*AB : VI 22 I AB : III-IV 17, V 11, VI 13 ; *tšu. gh. wtşh*. は I AB : I 11, II 11-12, III-IV 33 II AB : II 21, IV-V 88 V AB : D33 II D : VI 16, 53 III D : I 7, VI 23.

(8) *gpn. wugr* は常に結合して登場するバアルの使者. Dr はそれぞれ ac. *gapnu* : hb. *gepen* 《vine》および ac. *ugâru* 《irrigated field》と結付け, これらの神と考える (< Albright)

(9)(10) *lb'l, lrkb 'rpt* の *l* を Ais は Vokativpartikel, 即ちここはバアルに対する呼びかけとする. 我々は Dr, Grd と共に前置詞《against》とする.

(11) 以下(20)までの動詞を Ais (WU, MT) は s2m, すなわちバアルの行動を表わすものとする.

(11)~(13) *l* は否定辞 (*lâ*) が反語的に用いられたもの; 然し強意的な *l* (: hb, ac. *lû*) とすることもできる. 何れにせよ意味は同じ (Grd : UT § 9.16 13.35) ○*mḥšt* < *mḥst* については cf. JAOS, Vol.79 (1959) p.169-176 の M. Hold の論文○ *il* は普通名詞《神》としても現れ (B 18, C 26 等), セム語一般 (: hb. 'ēl~'elôh, ar.'ilâh, ac. *ilu*, syr. 'alâhâ) において本来固有名詞・普通名詞の何れであったかは決定し難い. 旧約では 'ēl 'elyôn (創14:18), 'ēl šadday (創17:1), 'ēl 'ôlām (創21:33), 'ēl qannâ (出20:5) のような表現がウガリットの最高神エールとの関連で, 特に注目される. なお旧約の E1 と区別して II と表記すべきだという主張 (例えば Jirku, p.8) は言語学的に支持されない. ウガリット語には *i* と *e* の対立がないので, ヘブライ語で 'ēl と表記される音もウガリットでは 'îl としか表記されなかったのである.

(13) *tnn* 《龍》: hb. *tannîn* (創1:21イザヤ27:1等) ○(11) *nḥšt* (G), (12) *klt* (G) という *ta* に対し, ここだけ *ištbm* (Gt) という *tp* が用いられているのは, Gt の *ta* は *tp* で代用されるという一般的傾向から一応説明されよう (Grd : UT § 13.58). 文末の *išbmnh* (G, *tp*) はこれに同化した形式? Ais : GU 所載の動詞形目録 (p.78-147) で数えると, Gt の *ta* 1例に対し *tp* 38例, これが例えばDでは *ta* 18例, *tp* 57例となる.

(14) 'qltn 《曲りくねった》は「大蛇」の epithet (I*AB : I2); hb. *nâḥāšs 'aqallâtôn* 《曲りくねった蛇》(イザヤ27:1) 参照.

(16), (18) の *ilm* を Grd (UL, UMC), Jirku 等は《神々》とする. 我々は文脈上, Dr, Ais と共に, 「エール」とする. このように *-m* (いわゆる Mimation) は「限定詞」(: hb の冠詞)として神名に接尾することも多い (Ais : GU p.35). *-m* の多様な機能については cf. Grd : UT § 11.4.

(20) *imthš*, *itrṭ* は何れも Gt *tp* 形で(14)~(19)の G 又は D の *ta* 形と対立する; (13)におけると同じ現象と説明されよう (上記註参照). しかし Ais

(WU) は(13)の動詞は「叙述」, ここは「現在・未来」とし, Jirku 等も現在の行動として訳す. 但し Dr は一律に ‘I have smitten..., made an end..., I have fought and become possessed of...’ と訳す.

(22) *mššy* は *nšy* (: ar. *nâšâ* «an der Stirnlocke packen» : Ais. WU) の Š 分詞 (*mušaššiy(u)* < **mušanšiy(u)*); Dr は *mš* と *šš* (: hb. *šîš*) とに分けて「前髪を引張る」とする.

(23) 前置詞 *l* は「to; zu, auf」だけでなく「from; von」をも表わす, とされる (Grd : UT § 10. 1; Ais : WU) が, これは統合する動詞の意義に呼応しているに過ぎない. 一般にウガリット語の前置詞は後続の名詞が表わすものとの空間的・時間的関係を, 動的にではなく静的に表わすと考えられる. cf. 既出 (B45) の *b* など.

(25) cf. D(9). *mn* (: ac. *mannummê*) は *mn* (: ac. *mannu*) の強意形? 同様な *-m* は前置詞 *b*, *k*, *l* にも接尾する; cf. hb. *b~bmô*, *k~kmô*, *l~lâmô* (Grd : UT § 10. 2)

(27) ‘*n* は ‘*ny* «答える» の絶対不定法形. hb と同じく, 定形動詞の前後に立って動詞の意味を強める (Grd. UT § 9.27, 29). ここを [(*w*)*y*]‘*n* (Dr < Virolleand, Ais) と補うと説明困難になる.

(53—61) は (33)—(35) の *s1* 形による繰返し.

(62) 逐語訳すれば, «そこで. 二番目 ($\sqrt{tn}$). 言葉の (pl). それを私は言う»; なおこの構文を C 20 と比較.

(64), (65) ‘stative’ 動詞は ‘active’ 動詞よりも *ta* 形をとり易い (Grd : UT § 13. 25)

(66), (67) *uğr*, *inbb* はそれぞれ「穴倉», «隧道»の意の地名で, アナトの居所を指す.

(67) *ilnym* は *iln* (: hb. ‘*êlôn*) の pl. (Grd : UT § 19.194); «神々, 特に地下の神々» (Ais : WU)

(68), (69) *uğr*, *inbb* の説明.

(70) 定型化した表現で用例多し, cf. hb. *nâtan pânâw b(l)*... (レビ

20 : 3 歴代史下 20 : 3 等) ○ *b'l* を普通名詞とし, 次行と続けて「パサンの高丘の主」とすることも可能 (Grd : UL)

(71) 「千町万里」: 'by the thousand acres (and) myriad hectares' (Grd : UT § 19.1256)

(72) *hlk*, (73) *tdrq* はそれぞれ動詞 *hlk*, *drq* から派生した名詞。

(74) *lpnnh* の *l* を《from》とする。これを《to》として《彼女の前へ妻達を行かせる→彼女を迎えに妻達をやる》(Gordon < Obermann ; Ais : MT) と訳すことは, *šrhq* (: hb. *rhq*, hif. 《遠くへ去らせる》) の意義上いささか無理である。cf. D (23) 註. 《彼 (バアル) の前から妻達を遠ざける》(Jirku, Dr < Virolleaud) は, *lpnnh* を *lpnwh* (A 6) の '異形態' と見なすとき可能である。我々はこの二形式の接尾辞を f : m の対立 (*lapânanhâ* : *lapânawhû*) と見る。

E

(1) *in* (: hb. 'ên) … *l* は非所有を表わす形式で, 所有を表わす *it* (: hb. *yêš*) … *l* (D 57) と対立する。

(10) *yṭb* は *ṭwb* (: hb. *šwb*) の tp, s 3 m で《戻る, 立帰る》; cf. 《pay (attention)》(Dr, Ginsberg), 《reconsider》(Grd : UL) ○ 「父なる牡牛」(lit. 牡牛・父なるエール) はエールの epithet (IAB : III-IV 34 VI 26 II AB : II 10, IV-V 47 III AB : C 16, 17, 19, 21 V AB : E 43 VI AB : III 26 II D : I 24 等)

(12) *nn* (sf. s 3 m ?) はこのように前の語と切離される (I*AB : II 7 *tt'*. *nn*; I D : 147 *yqbr. nn* 等) こともある; cf. I D : 59 *tštnn*; II AB V : 100 *yblnn*。

(13) *dmm* 《血と共に》の -*m* は '副詞的 -m' で, 名詞 (又は名詞的機能の形式) に接尾してこれに副詞的機能を与える。既出のものに B 15 : *mṭm* 《杖で》, D 29 : *p'nm* 《lit. 足において》, D 80 : *gyrm* 《水源から》; cf. hb. *hin-nâm* 《空しく》, *rêq-âm* 《空手で》, *yôm-âm* 《毎日》(Grd : UT § 11.4, 5; Ais : WU p. 175)

(17) Ais (MT), Jirku 等に拠る ; ‘Anat planted her feet…’(Dr);
 ,She springs with foot/And leaves the earth’ (Grd : UL).

(26), (27) 「七…八」の対句は好んで用いられる : šb'. šnt.../wtmn. nqpn̄t
 《七年…八歳》(BH : II45-6 SS : 66 ID : 42); šb'/[a] hm...tmnt. bn
 《七人の兄弟, 八人の息子》(IK : 8-9); šb'. bnm/wtmnt ttmnm 《七
 人の息子, 八人の…》(IIK : II23-4); šb't/ġlmk. tmn. hn̄zrk 《君の七
 人の若者・八頭の豚》(I*AB : V8-9); šb'm. try/tmnym. [z]byy 《私
 の70人の君侯・80人の隊長(?)》(IIK : IV 6-7); šb't. lšb'm. ahh...
 /wtmnt. ltmnym...《77人の兄弟・88人の…》(I*AB : V 20 BH : II49-
 50). これらにおいては7+8ということでは勿論なく, 七という完全数を
 八によって更に強めているのである. なお cf. 「七顛八倒」○これらの
 「七・八」の対句には *ap* は現れないから, これを《sogar》(Ais : WU)
 とすることは疑問で, 我々は *ap. sgrt* を *h̄dr̄m* の対語と考える (Grd.
 UT); 然し七・八は修辭的対語であるから, Grd (UT § 19.1738) のよ
 うに ‘a palace containing 7 inside rooms so that the whole complex
 consists of 8 compartments’ と解釈するのは見当違いである.

(33) *ilm* の *-m* は限定詞○この špš̄ は「エールの光」(IAB : I8*,
 11*, 13*II AB : VII21 ID : 209等) という epithet が付いているから神
 名 (: ac. Šamšu) と考えられるが, 文脈上《太陽》も可能.

(36) *mt* (冥界の神「死」) はこの AB 神話群で重要な登場者の一 (I
 AB : II13等, V9, VI7等 IIAB : VII47, VIII30 I*AB : III9) ○「天が
 衰えた」ということは Grd (UT § 19.1341) によれば, 天体が一時停止
 したこと (cf. ヨシヤ10 : 12-3; Ilias 2 : 412-8 18 : 239-42).

(36) *yilm* の *y-* は *ilm* (IIAB : III9 IID : VI7), *ymm* (IIIAB : B 36),
mtm (VIAB : II 8 III MF : 4), *btl̄tm* (IID : VI34) のように限定詞 *-m*
 を伴った神名 (*-m* を伴わぬ例も IAB : III-IV 25等にある) の前に多く見
 出される間投詞. cf. ar. *yâ*.

(39) *ahd-* は 'h̄d の imp (Ais : WU) ではなく, tp ('a'h̄ud-) ○この

ような *al* は cf. *hitpallêl...w'al nâmût*. 《…祈れ, …さもないと私共は死ぬ》(サム上12:19). なお cf. Grd: UT §13.36

(45), (46) Dr 等による; 又は《…お前は男のようであることを, 女神達の中でお前程不遜な者はないことを》(Ais: MT) のようにも解される.

(47) *lbtlt* の *l-* は間投詞.

(53) ここと同文脈の IIAB: IV44 では *w* を伴って *tptn. win. d'lnh* となっている. このように接続詞 *w* は並列的のみならず従属的機能をも果し得るが, 既出の関係詞 *d* と同様, これの使用は必ずしも不可欠ではない. cf. B (46)(47) 註, C (20) D (22) 註.

(54) *nbln* の *-n* は次行の *nbl* を考慮すると, sf. s3m ではなく *n. energ.* であろう (*nabilunna*). *nbl* は *ybl* の tp, pl 1.

(57) 「王エール」という表現は他には IIAB: IV-V38, 48 にあるだけ.

(59) *ilt* (: ac. *iltu*) は *il* の女性形 (B18 等) であるが, 大体アシラの副名として現われる.

(60) *wn* は *w* (: syr. arm. *way*, ac. ay. ar. *way*) 《wehe! ach wie gut!》+ *n. energ.*? (Ais. WU); Grd (UT §12.9) は接続詞 *w* + *n* とし, hb. *wayyigrâ* などの *wa-* と関連させる.

F

(7) 大体 Dr に拠る推定訳.

(8) 「アシラの漁夫」はアシラの使者の称号? *dgy* は多分 *du*.

(9) *qdš. amrr* は他の並行個所では *qdš. wamrr*. 上述の二人の使者の名.

(10) *al* は反語的に用いられている; cf. D (11) 註

(11) *hḳkpt* (= *hkpt*) は El-Amarna 文書の Ḫi-ku-up-ta-aḥ 《Memphis》を指すとされる.

(12) *kptr* は *kaptôr* (アモス 9:7 等) (: ac. *kaptâru*) で, クレタ島のこと?

(15) *ktr* は *ḥss* と並んで屢々現われる工芸の神; 母音については *^mku-*

sar-a-bi (PRU III, p. 249) 参照.

(18) 「両手の器用な巧者」はクサルとハシスの epithet.

参考文献略号

Ais : GU=Joseph Aistleitner : Untersuchungen zur Grammatik des Ugaritischen. Berlin 1954.

Ais : WU=Joseph Aistleitner : Wörterbuch der Ugaritischen Sprache, herausgegeben von Otto Eissfeldt. Berlin 1963.

Ais : MT=Joseph Aistleitner : Die Mythologischen und Kultischen Texte aus Ras Schamra. 2. Aufl. Budapest 1964. (1958¹)

Dr=G. R. Driver : Canaanite Myths and Legends. Edinburgh 1956.

Gray=John Gray : The Legacy of Canaan, the Ras Shamra Texts and their Relevance to the Old Testament. 2. ed. Leiden 1965.

Grd : UL=C. H. Gordon : Ugaritic Literature, A comprehensive translation of the poetic and prose texts. Roma 1949.

Grd : UMC=C. H. Gordon : Ugarit and Minoan Crete. The bearing of their texts on the origins of western culture. New York 1966.

Grd : UT=C. H. Gordon : Ugaritic Textbook. Grammar, Texts in transliteration, Cuneiform selections, Glossary, Indices. (Analecta Orientalia 38) Roma 1965.

Jirku=Anton Jirku : Kanaanäische Mythen und Epen aus Ras Schamra-Ugarit. Gütersloh 1962.

AHW=Akkadisches Handwörterbuch, herausgegeben von Wolfram von Soden. Bd. I(A-L). Wiesbaden 1965 (1967現在 *mû* まで)

JAOS=Journal of the American Oriental Society.

RHR=Revue de l'Histoire des Religions.

VT=Vetus Testamentum.

その他の略号

形式の前の：は「対応」

A<Bは人名の場合は「Bの説をAが継承」；形式の場合は「BからAへ通時的変化」.

形式はイタリックで、意義は《 》に入れて示す.

ac アッカド語

ar アラビア語

arm アラム語

cf 参照せよ

du 双数

hb ヘブライ語

imp 命令形

lit 逐語訳

ph フェニキア語

pl 複数形

pt 分詞

sf 接尾辞

s1 単数1人称

s3m 単数3人称男性

s3f 単数3人称女性

ta [A(4)註参照]

tp [A(4)註参照]

ug ウガリット語

(附記：この論文は昭和42年度文部省科学研究費による各個研究「ウガリット語の研究」の一部である.)

—1967. 11. 3—